# 食品のリスクを考えるワークショップ（豊田市）～どう思う？食品添加物～

## 意見交換時の主なやりとり（概要）

平成 23 年 1 月 14 日

於：スカイホール豊田大会議室

【グループ間の意見交換（途中、コメンテーターからのコメントあり）】

注：＜参＞＝参加者　＜市＞＝豊田市　＜委＞＝食品安全委員会　＜コ＞＝コーディネーター

F グループから A グループへの質問

《F》

A グループで整理された模造紙を見てまず「添加物は少ない方がいい」という話し合いがあったのだなという印象をうけた。添加物がないのにこしたことはないが、でも廃棄物が増えてしまう問題があったりと、現時点ではもっと上手につきあっていけたらいいのではないかと感じた。A グループでは、そのところをどのように議論したのか。添加物はなぜ少ないほうがいいと話し合いでだされたのか。

《A》

最初に情報提供を受けた段階では、添加物についてマイナスのイメージがあった。安全性は確認されているのだけど、食品添加物と付き合っていく中ではこれ以上増やしていく必要があるかという疑問や、量も減らせるのではないかという意見が出た。正直、添加物を使った優位性については議論ができず、マイナスのイメージの議論について盛り上がった。

＜市＞

企業は必要以上の添加物は使っていない。保健所から指導する場合も、基準を守るよう指導している。

＜委＞

科学が進歩するにつれて、身体に悪い影響を及ぼすものはある化学構造を持つことが分かってきている。現在の食品添加物はそのような構造を持つものは避けている。。より安全性を見越して、かつ、必要な作用がある物質が使用されているのが現状である。

G グループから B グループへの質問

《G》

B グループの模造紙を拝見し、「マスコミとの勉強会」という付箋紙があった。

マスコミとの勉強会とはどういうことなのか、そのあたりはどのような意見交換がされたのか教えてほしい。また、表示についても「気になった人が勉強できるように表示内容を細かくわかるような情報提供をする」という付箋紙があったが、知りたい人だけが知ることができるほうがいいのではないかと私たちは思った。

《B》

マスコミは消費者への影響が大きいので、食品添加物についての正しい情報提供をもっとしていたほうがいいという話が出された。

表示については、天然の物質か、化学物質なのか等について、添加物の情報が少ないという意見が出された。天然なら大丈夫と認識してもらうよう、表示がもっとあるべき。
知りたい人だけではなく、知らない人にも幅広く伝える必要があるという意見が出された。
＜委＞
情報発信する側が正しく情報を読み取り、正しい理解をすることが必要。食品安全委員会でもマスコミとの懇談会（勉強会）を実施している。
また、天然の添加物が安全であるということではない。
科学的に合成したもののほうは安全性を科学的に検証され、品質的にも安定していると言える。
＜参＞
食品安全委員会のメディアとの勉強会の出席率はどうか。
＜委＞
テーマによるが、声をかければ大概のマスコミは出席していただいている。

Aグループから C グループへの質問
《A》
C グループの模造紙を拝見して、食品添加物に対し、「不安」、「情報がほしい」、という思いがみてとれる。食品添加物についての情報とどう向き合うか、また、自分からその情報を得ることついてはどのような話し合いがされたのか。
情報をもらったあと、自分自身はどのように向き合っていくのかが、模造紙からはみえなかった。
《C》
情報を得られる機会がなかったり、情報を得る方法を知らない消費者が多いのではないか。まずはそれを知らせるべきではないかという意見が出された。また、その情報を判断するには、基礎知識が必要であり、教育の中で伝えていくべきという意見が交換がなされた。
《A》
では、例えば、添加物は危険だと学習した場合はどうなるのか。教育すればいいというよりむしろ、科学的な基礎知識が必要ではないかと思うが。
《C》
危険性だけを知るというのは教育ではない。危険性はあるけど有用性があるということも伝えるべきである。それは、行政や企業が担う必要があるかもしれない。
＜市＞
行政からの情報発信について。教育というのはおこがましい。むしろ、情報の提供の方があっているかもしれない。それぞれのコミュニティや、小集団から大集団、それぞれの要望にこたえていく形で情報を発信・提供していくよう努めている。

B グループから D グループへの質問
《B》
質問は特にない。D グループの模造紙を拝見し、意見として、インスタント食品は添加物が多いとあるが、カップラーメンや乾燥物よりもお弁当のほうが意外と添加物が多いということを伝えたいと感じ

た。
《D》
コンビニのお弁当に、添加物が多く使われているということは承知している。主婦は承知の上で買うものと買わないものがある。インスタントのほうが種類が多いので、代表的なものとして記載した。

Cグループから E グループへの質問
《C》
Eグループの模造紙を拝見して、企業やマスコミからの情報提供を増やしたらどうかという意見が出されていたようだが、自分のところに有利になるようなものだけ出す企業や記事として売れるものだけを出すマスコミにはどう対処すべきか。
《E》
行政からの情報発信を信じないということはない。だが、食品安全委員会の HP(ホームページ)を時々拝見すると、欲しい情報に行き着くまでに時間がかかってしまう。概して行政の情報発信は分かりにくい。メディアには正しい情報を分かってもらうことも大切。危ない情報のみを出すだけでなく、正しい情報が出せるメディアを期待する。企業の発信情報については、利害的なものがあるのはわかる。しかし、中には非常に分かりやすい企業の HP もある。そういうところへは、自分たちも見に行くことが多い。ただし情報かどうかということを判断するのは難しい、学んでいくしかない
＜委＞
HP は改善に向けて取り組んでいるところである。リスク評価機関は、科学的根拠を第一に考える。そのため、わかり辛さがでてしまう。一般向けと専門向けに分けて情報を発信するようにしている。
＜市＞
HP は豊田でも同様で、わかりやすくするというのはなかなか難しい。簡単にはかえられないというのが大きなネックとなっている。誰でも、情報をしっかり見極めるのが大事である。情報を収集するためのお手伝いをするのが行政の役割だと思っている。

D グループから F グループへの質問
《D》
二つあります。一つは、「消費者の意識改革が必要」という付箋紙があったが、それについては、どのような話し合いがされたのか。二つ目は、見栄えにあまり左右されない風土作りというのはどういうことか。
《F》
私たちのグループは、添加物はある程度必要という、どちらかというと肯定派のグループでした。添加物の発色剤については機能的に人体に影響があまりないもの。見栄えだけのものと理解している。
《D》
家庭で使う添加物を減らそうとは具体的に何か。
《F》
家庭では意外と使いたいだけ使っていたり、自分たちが使う分にはあまり考えたことがなかったかなと

いう意見がでたということ。
＜市＞
家庭で使う添加物というのは、一般に言う調味料、使用基準はない。化粧で使う口紅も着色料であるということも考えてもらいたい。
E グループから G グループへの質問
《E》
一つ目は「外国からのお土産の表示」について。外国へいって向こうでいろんなものを食べる。英語の表示が読めなければ、何が入っているのか分からない。これについてはどうしたらいいのか、どうしてほしいのかという意見交換はされたか。二つ目は、生きていく以上食べることは必須だが、「何をどう食べるか」という問題である。食品は生鮮食品と加工品に大雑把に分けられるが、加工食品には添加物がたくさん入っている一方、生鮮食品にはほとんど使われないが、残留農薬、抗生物質の問題がある。リスクを大きくとらえると、選択肢が必要だと思うが、それをどのように考えたか。
《G》
外国の表示についてはコメンテーターにうかがいたい。選択肢については、自分たちの考えを持たなくてはならないと思う。
＜委＞
専門外だが、海外土産については、自家用として自分の判断で買ったものであるから規制はない。個人の責任であり、お土産をあげたとしてもその人の責任となるかと思う。ただ、日本に持込が禁止されている食品もある。検疫の問題で食肉製品については空港で没収されるものもある。
《E》
食品安全委員会にお願いしたいこととして、消費者に表示を読み取る力をつけるためにも、和名・英文併記をネット上でもいいから公開してはどうかと考える。
＜委＞
食の安全ダイヤルという相談窓口を設けているので、質問があれば問い合わせていただきたい。
《C》
個人で肉の持ち込みはできず、空港で放棄となるので、お土産で買ってこないほうがいい。

【模造紙に書かれた質問への回答及びコメント】
＜コ＞
A グループの模造紙に、「食品と栄養剤の境界線がわからない」とあるが、これについて、コメンテーターから回答をお願いしたい。
＜市＞
食品であっても添加物的な使用をすれば添加物となる。ビタミン C は酸化防止剤にも栄養剤にもなる。鉄釘や炭なども使用によっては添加物となりうる。
＜コ＞
Bグループの模造紙に、「日本以外の国での食品添加物についての考え方はどうか」とあるが、これについて、コメンテーターから回答をお願いしたい。
＜委＞

食文化が違うので、食品添加物の使用についても国柄がある。たとえば、「くちなし色素」は日本と韓国くらいしか認められていない。使おうと思うと認可費用の問題もあるし、他に有用な着色料があれば無理にコストをかける必要性は低くなる。規制内容は各国の食文化や考え方も関係してくる。

＜コ＞

複数のグループの模造紙に書かれているが、食品添加物を複数摂取した場合、子供と大人で影響の違いはあるのか。また、胎児に影響はないのかという疑問があるが、この問題はどうか。

＜委＞

食品中の添加物同士の化学反応と、複数の添加物が体内に摂取された後の相互作用について考えることができる。個別の食品添加物について動物実験の結果等から ADI を設定しているが、人間が摂取する量はADIの値よりはるかに低く、ごく微量で体内に蓄積するものではない。また、体に影響しないもの同士が体内で一緒になっても、新たに有害な作用を及ぼすという研究結果もない。

＜コ＞

サッカリンという甘味料が昔は使われていたが、今はどうなっているのかという質問があるが、どうか。

＜委＞

今も使用されている。動物実験でラットに膀胱癌の発生が見られたため、一度は使用禁止になったが、それは、ラット特有の問題であることが判明し、再度使用が認められた。

＜コ＞

食品安全委員会のメンバーの選定や、予算はどうなっているのか？

＜委＞

人選については、いろいろな専門分野で日本を代表するような知見を持っている人から選出され、最終的には国会で決定する。予算については、減少気味である。